

昭和天皇の水城村行幸

昭和24年（1949年）5月から6月にかけて、昭和天皇は九州を訪問します。昭和21年2月から始まった、いわゆる戦後巡幸の一環で、終戦後初めて、中折帽子に背広姿の天皇が九州の人々の目前に登場しました。各地の熱狂ぶりを伝える当時の新聞記事では「人間」としての昭和天皇が強調され、「ニコニコ」「お父さんのよう」や「科学者天皇」という表現が目立ちます。そして農業や鉱業などの現場に立ち会い従事者をねぎらう様子や、戦争で家族を失った人を慰労する姿が多く報道されました。

福岡への行幸は、昭和27年に県が発行した『天皇陛下行幸録』にうかがうことができます。これは昭和天皇の訪問から約3年後に作られた「写真と文による行幸記」で、編集担当者本人が出版の悠長さを「お役所仕事」と自嘲するものの、写真を豊富に掲載し、行幸の行程の詳細が取められたこの記録は、当時の福岡県下での『巡幸熱』を伝える好資料といえます。

この行幸録の中には、昭和天皇が水城村（当時）の授産場を訪れた時のことが記されています。福岡滞在第3日目、宿泊所である二日市の大丸別館から福岡市内へ向けて出発したお召車は、途中水城村授産場に立ち寄り、この施設はもともと戦争被害者の救

太宰府人物志

資料室だより 55

済を目的として設置されたもので、昭和23年5月に水城村民生委員助成会と遺族会の経営で始められました（昭和25年7月には村営となり、生活保護一般の事業へ）。主に薬工品の製造を行っており、行幸当時の作業従事者は男女合わせて30人、うち戦争により夫を失った女性が19人いました（『太宰府市史 通史編Ⅲ』）。訪問時間は10分程度の短いものでしたが、その中で昭和天皇は、2児を抱えて働く中国系の寡婦に「どうですか」と声をかけ、恐縮した彼女が中国語で「努力工作」と応じたことが「感激譚」の一つとして紹介されています。

昭和天皇は、皇太子時代の
大正9年（1920年）にも
この地方を訪れています。皇
太子は当時満19歳。4月6日、
久留米第18師団の視察後に二
日市を経て太宰府に入り、天
満宮へ観世音寺へ戒壇院へ大
宰府政庁跡へ水城跡と、2時間足らず
の間に主だった史跡を巡りました。中
でも皇太子は水城跡に興味を持ち、わ
ざわざお召車を止めて時の県知事・安
河内麻吉の説明に聞き入ったそう
です。

以後およそ30年、終戦を経て、再び
目にする奉迎の光景は、天皇に、村民
に、どのように映ったのでしょうか。